

## ■研究調査レビュー

### 種子島<sup>おばま</sup>小浜遺跡発掘調査概要報告

中村 直子（埋蔵文化財調査室）

#### 1 はじめに

種子島では、砂丘上に立地する埋葬遺跡が多く見つかり、埋葬人骨の残りも良いことから、考古学的・人類学的データを得やすい地域となっている。しかし、この被葬者たちが生活していた居住区の調査はあまり進んでおらず、生業や居住に関するデータは不足している状況である。

種子島は、南西諸島の北部圏に位置するが、弥生・古墳時代およびその並行期において、南西諸島を中心とする狩猟・採集を生業の中心とする文化と、本州・四国・九州を中心とした本格的農耕技術を導入し、初期国家形成期にあたる文化との接する地域にあたる。また南種子町広田遺跡では、貝製品などに中国文化との類似が指摘されており、これらの起源が九州や他の南西諸島に見られないものであることから、研究者の注目を集めている。しかし、広田遺跡で出土した豊富な貝製品がどのような状況で製作されたのかについては、不明な点が多い。

筆者ら調査団は、これらの解明を目的として、平成15年より居住区の調査を目的とした遺跡の踏査を行っていた。2004年4月に行った遺跡踏査中に立ち寄った小浜遺跡で人骨が露出しているのを発見した。砂丘の砂採り跡の壁が崩れて露出していたのだが、その砂丘壁がさらに崩壊する危険性があったため、西之表市教育委員会や鹿児島県教育委員会とも協議の上、本調査団が発掘調査を行うことになった。

#### 2 小浜遺跡の立地と歴史的環境

小浜遺跡は種子島東海岸部の北側、西之表

市伊関浜走に所在し、小さな海岸砂丘部に立地している。付近の工事によって人骨が発見されたことをきっかけとして、1997年に熊本大学を中心とする調査団が発掘調査を行い（甲元・蔵富士 1998）、3体の埋葬人骨を調査している。この調査では、副葬品などは出土しなかったものの、墓と層位的に時期が近いと考えられた層から古墳時代並行期の上能

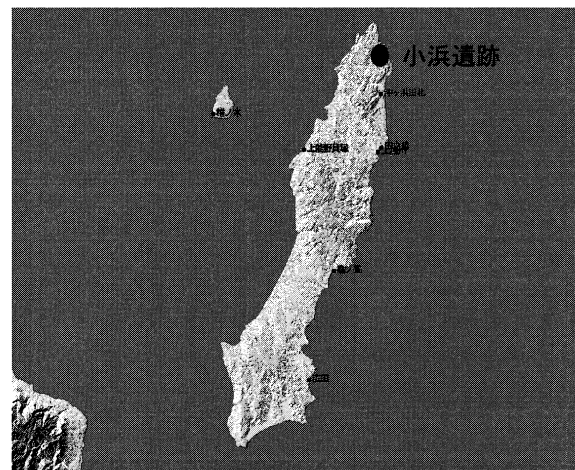


図1 小浜遺跡の位置  
他は先史時代の砂丘埋葬遺跡

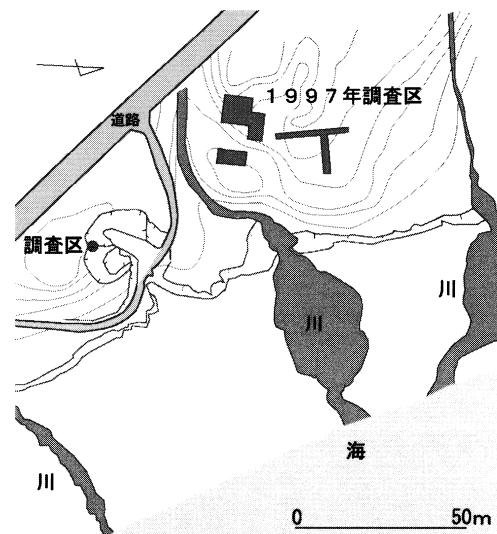


図2 調査区周辺の地形図 (S = 1/2000)

野式土器が出土したことから、その時期のものとして報告されている。

### 3 調査期間と体制

調査期間：2004年6月6～13日

調査担当者：中村直子・新里貴之（埋蔵文化財調査室）・竹中正巳（鹿児島女子短期大学）・峰山いづみ

調査協力者：西之表市教育委員会・沖田純一郎・石堂和博・徳田有希乃・南種子町教育委員会

### 4 調査の概要

#### 4.1 層位

1～13層を基本土層として確認した。いずれも砂層で、色調は灰黄褐色(10YR 4/2)を基調としている。このうち、特徴的な層は以下のとおりである。

6層：覆石が含まれる。

7層：墓壙掘り込みラインを確認。

10層：貝殻を含む。

13層：こぶし大～0.5cm大の軽石を含む。

10層と13層は埋葬遺構よりは下の層で、古い時期のものであるが、それぞれの層に含まれる貝殻と軽石は砂丘形成時期の手がかりになると考えられたため、サンプリングを行った。

#### 4.2 遺構

遺構は、土壙墓1基(2004-1号墓)、覆



写真1 調査区全景

石墓1基(2004-2号墓)を確認した。

#### 2004-1号墓

墓の種類は土壙墓だが、墓壙直上まで掘削されていたため、覆石墓である可能性もある。平面形は楕円形に近い。現状では、長さ1.38m、幅0.7mだが北西部分は破壊されており、もう少し大きくなるものと思われる。また、墓壙の平面ラインを検出できた面がかなり下位であったため、本来の墓壙の大きさはもう少し大きくなると思われる。

埋葬人骨は1体であった。埋葬姿勢は横臥屈葬で、頭位は北西、西側に顔を向けていた。手足を非常にきつく曲げた屈葬姿勢であることが特徴的である。また、足が頭よりも高く上がっており、墓壙の底面もその方向が上がっていることから、墓壙は大雑把に掘られたと考えられる。きつい屈葬姿勢から考えると、手足を緊縛していたと予想され、墓壙に被葬者を入れる際、必然的に横倒しの状態になったとも推定できる。副葬品かどうかは不明だが、2、3cm大の巻貝が人骨に接して数個出土した。貝殻に加工痕などは認められない。

#### 2004-2号墓

この墓は、2004-1号墓近くの砂丘壁面に礫群が露出しており、その周辺の清掃中に、

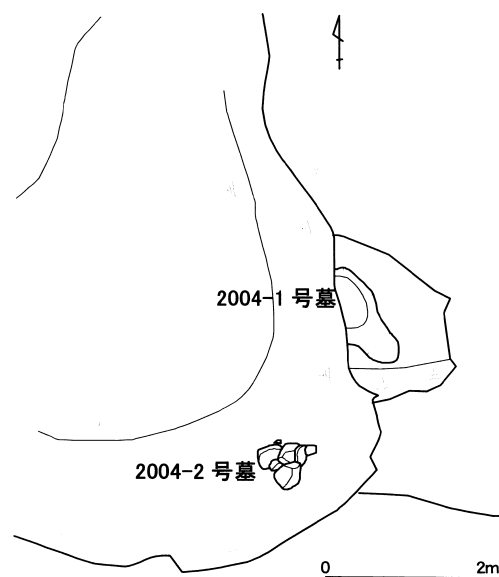


図3 遺構配置図 S=1/100

礫群の真下から人骨頭頂部が露出したこと、さらに精査すると墓壙の立ち上がりを確認できたことから覆石墓とした。調査は壁面観察のみで未調査である。墓壙は、礫群の下面から墓壙の底面まで深さ約80cm、幅約1.2m（壁面で）を測る。頭頂部の向きから、頭位は北向き、顔は西向きであると推定される。

5 埋葬人骨（2004-1号墓出土人骨）について

2004-1号墓の埋葬人骨については、本調査団の竹中正巳による所見：1）～5）を記述する。なお、この人骨については、6）放射性年代測定分析を行った。

- 1) 全身が完全な状態で遺存しており、保存状態は非常によい。
- 2) 性別と年齢は、男性で壮年である。
- 3) 頭蓋：脳頭蓋は、頭蓋最大長が著しく長く、そのため頭型は長頭（頭蓋長幅示数72.8）を示す。顔面頭蓋は、顔高、上顔高、鼻高が極端に低く、低・広顔傾向を示す。

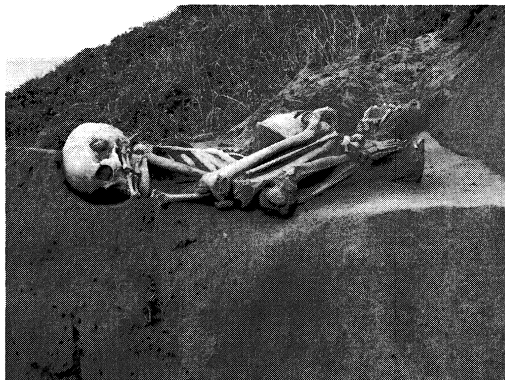


写真2 人骨出土状況(上:西側から,下:南東から)

ただ、眼窩高は低くはない。顔面平坦示数は、いずれも平坦（前頭骨平坦示数14.9、鼻骨平坦示数26.9、頬上顎骨平坦示数21.9）である。咬合は鉗子状咬合で、歯の欠損は下顎の小白歯～大白歯部にかけて多い。下顎左中切歯が欠損しており、風習的抜歯が行われた可能性も考えられないわけではない。

- 4) 体肢骨：脊椎は腰椎に骨棘が目立つ。上肢・下肢は太く大きい。推定身長は159.7cm（右大腿骨最大長からピアソン式で計算）である。上腕骨と大腿骨の中央周径比は79.5（右）である。最大長径比は橈骨／上腕骨で77.9（右）、脛骨／大腿骨で80.3（右）を示す。
- 5) 周辺の各時代集団との比較：同じ種子島の広田遺跡や鳥ノ峯遺跡から出土した、短頭でBa-Br高が低く、低・広顔で立体的な顔立ちの弥生から古墳時代併行期にかけての人々と比較すると、今回の小浜遺跡から出土した人骨の形質は大きく異なる特徴を持つ。小浜の長頭、顔面の平坦性、太く大きな上肢・下肢、身長、四肢の中央周径比・最大長径比は大きく異なる特徴である。小浜の低顔性は、広田や鳥ノ峯と共通する特徴である。小浜2004-1号墓から出土した人骨は、低顔や上腕骨と大腿骨の中央周径比を除くと、日本列島の中世人と同様の特徴を多く持つ。
- 6) 放射性年代測定：補正年代520±40BP、暦年代1420年（交点）。

測定No. (Beta-)	<sup>14</sup> C年代 (年BP)	δ13C (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 (年BP)	暦年代(西暦) (1σ:68%確率, 2σ:95%確率)
196868	410±40	-18.0	520±40	交点:calAD1420 1σ:calAD1410~1430 2σ:calAD1320~1340, 1390~1440

6 まとめ

1997年調査との関係

覆石墓、強い屈葬姿勢、北東もしくは北西

の頭位で北向きであること、副葬品を持たない等、類似点が多い。近接した時期の同一の墓域であったと考えられる。本調査地点とは約50m離れているが、一帯がほぼ同時期の墓域である可能性が出てきた。

#### 時期的位置づけ

出土人骨の放射性年代測定結果や形質から考えると、中世の墓である可能性が高い。弥生時代後期～古墳時代並行期の鳥ノ峯遺跡や広田遺跡と比較すると、覆石の形態が異なることや、墓に標石を置くという埋葬形態が普遍的なものであると捉えれば、この結論と矛盾しないと考えられる。先史時代の広田遺跡等と類似する強い屈葬姿勢も、中世墳墓の埋葬姿勢の事例に見られる。管見した資料によると、九州では八代市阿弥陀堂遺跡（吉永明1996）などがあげられる。したがって、先史時代の墓をイメージさせる「覆石墓」という名称を用いるのは適切ではないかもしれない。

#### 調査の意義

本調査では、小浜遺跡の埋葬遺構が、これまで種子島で発見されている砂丘上の埋葬遺跡と異なる中世のものであるという結論が得られた。島内の他の遺跡に比べると、埋葬姿勢は類似しているものの、遺跡の立地が異なっている。小浜遺跡は砂丘に立地してはいるが、遺跡の東側には急峻な山が迫り、周辺に居住できそうな平野部がない。付近に現在の集落もなく、中世の遺跡も確認されていない。人里離れた場所に埋葬されていることになる。これまで発見された埋葬人骨いずれも副葬品はなく、墓壙の掘り方も大雑把なことを考えると、薄葬であると言える。

中世には、鎌倉の海岸部の遺跡である由比ヶ浜遺跡（五味・斎木 2002）のように、数百体の人骨や動物骨をひとつの墓壙に乱雑に埋葬しているものや、単葬ながら極端に体を折り曲げた埋葬姿勢のものなどが発見されており、当時の死生観やそれに基づく埋葬儀礼が反映されていると考えられている。鎌倉

のような都市部と種子島のような島嶼部では埋葬事情も異なるだろうが、中世的な死生観に基づく埋葬で、かつその南限である可能性もある。一方では、先史時代の広田遺跡や鳥ノ峯遺跡に類似した埋葬姿勢があり、弥生時代からの伝統を引き継いでいる可能性もあり、今後の重要な検討課題となった。

#### 文献

- 甲元眞之・蔵富士寛（1998）小浜遺跡調査概要. 環東中国海沿岸地域の先史文化. 3 - 12. 金曜会.
- 吉永明（1996）阿弥陀堂遺跡. 八代市埋蔵文化財調査報告第7集. 八代市教育委員会.
- 五味文彦・斎木秀雄編（2002）中世都市鎌倉と死の世界. 高志書院.